

司馬遼太郎

街道をゆく

人名・地名録

朝日新聞社編



馬遼太郎

道をゆく
人名・地名録



朝日新聞社

司馬遼太郎 『街道をゆく』 人名・地名録

定価 二五八〇円

一九八九年三月一日 第一刷発行

一九八九年四月二十日 第三刷発行

編者 朝日新聞社

発行者 八尋舜右

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五丁目三番二 / 電話 〇三・三三三〇三三 (代表)
編集・図書編集室 / 販売・出版販売部 / 振替 東京〇一七三〇

印刷所 凸版印刷

製本 青柳製本

© Ryotaro Shiba 1989, Printed in Japan

ISBN4-02-255932-2

序に代えて

司馬遼太郎

『週刊朝日』に『街道をゆく』を連載しはじめたのは一九七一年一月からである。

当初はごくかるい気持ちでいた。

それまで吉田松陰を主人公とした『世に棲む日日』という小説を連載していたのだが、編集部のほうから、それがおわってもなにか紀行文のようなものという依頼があった。

いまならとてもあらたな仕事をおこすなどの体力はないが、ついその気になってしまったのは、まだ四十代だったからだろう。

近江が、手はじめだった。天候もよく、同行の須田剋太画伯も終始暗ればれとして、旅のおわりに、司馬さんこれはやめないでおきましょう、といわれた。なにやらうれしくなったのが、ここまでつづくばねになった。

そのつど、本になって出た。本は、索引があつてこそ完全な書物といえるのだが、連載して十九年目になってようやくそれができて、二度目のはげみを感じている。

——索引そのものが読めるように。

というのが、編集部の志であつたようで、それだけに大変な苦勞だったに相違ない。

凡例

- 一、本書は『街道をゆく』（1〜31巻）の中から、比較的まとまった記述のある歴史的人名・および地名を採録した。
- 一、配列は人名編、地名編とも五十音順とした。
- 一、西洋人名はファミリー・ネーム（姓）を項目とした。
- 一、年齢はことわりのない限りかぞえとした。
- 一、各項末尾に原文掲載の巻数と章見出しを示した。↓は指示のところに、その項目に関する記述があることを示す。
- 一、採録に際しては、行の変更および省略を一部おこなった。
- 一、「」は編集部の補注である。

目次

序に代えて

人名編

地名編

戦国人物年表

幕末人物年表

『街道をゆく』総目次

910 906 902 451 1

相沢三郎

あいざわさぶろう 一八八九—一九三六

昭和十年というのは二・二六事件の前年で、私はまだ小学五年生だったが、騒然とした時代の空気に記憶がある。たとえば白昼、陸軍省を訪ねて行った現役の陸軍中佐相沢三郎という人物が、軍務局長である少将永田鉄山をその執務室において斬殺した事件が、この年の八月におこっている。下手人にいわせれば天誅を加えたのだという。この事件の異常さはこの下手人が自分と思想の適わない局長を斬ったあと、そのまま新任地へ赴任すべく陸軍省の建物を悠然と出ようとしたことであり、さらに異常なことは相沢は精神病者でもなんでもなく、四十七歳の常人だったということである。当時、陸軍に皇道派と統制派という二つの閥があるといわれたなかで相沢は皇道派に属し、政治色はあまりなく、ただ熱狂的な天皇崇拜者であった。統制派の中心的人物といわれる永田鉄山を、目して天皇の軍隊を私物化しようとしていると見、天誅を加えたのである。相沢は、思想的正義というものが人間をどう変え、どう行動させるかということの典型のようなどころがある。

④丹波亀岡の城

青木繁

あおきしげる 一八八二—一九一一

久留米うまれの画家青木繁の代表作のひとつに、「わだつみのいろこの宮」がある。

明治十五年にうまれた青木繁は、二十九年しか人生を持たなかった。右の作品はその死の四年前に発表したもので、大島清次氏によると、房州の布良ぬらに遊んだとき、水中めがねで海底の色彩の変化におどろいたのが動機だったという。

その後、各地の漁民たちに経験をきいたり、長崎の海では実際に海にもぐってイメージを得たらしい。

⑬山ぶどう

青山忠誠

あおやまただしげ 一八五九—一八七

この時期〔鳥羽伏見の一戦〕、藩主は江戸にいた。明治六年に病没し、まだ十五歳だった青山忠誠が当主になった。忠誠はわずか二十九歳で病没するのだが、この人物が、代々の青山家でもっともおもしろい殿様だったかもしれない。かれは維新における篠山藩ののんきさを恥じ、なにごとかを為そうとした。私財を投じて篠山に鳳鳴義塾（いまの鳳鳴高校）をつくった。自分も創設早々の陸軍幼年学校に入り、さらに士官学校にすすみ、明治十三年、歩兵少尉になった。当時、旧大名でこういう世界に入る者はなく、大名華族たちからも奇人のようにいわれた。

④篠山通れば

赤尾道宗

あかおどうしゅう 生没年不詳 十五世紀

赤尾の道宗というのは、べつに橋を架けたわけでもなく、百姓一揆の大将でもなくまた近隣に威をふるった武将でもなかった。道宗は僧ではなく、在家の身ながらこの白川谷一帯に浄土真宗をひろめたひとというにすぎない。

在家で、身も心も仏法そのものになってしまった人間のことを浄土真宗では妙好人みょうこうにんといい、鈴木大拙博士などは禅宗の覚者とおなじ位置においている。因幡いんぱんの源左、讃岐さぬきの庄松といったふうの妙好人の列に赤尾の道宗も入っているのである。

「越中国赤尾の浄徳といひしものの甥に弥七といひしをのこありけるが」と、蓮如の文章にある。

④山ぶどう

赤根武人

あかねたけと 一八三六—一八六六

長州藩が佐幕派政權に牛耳ぎみじられたころ、その時期の奇兵隊総監（通称、総督）であった赤根武人が、動揺した。赤根は高杉〔晋作〕的傾向を過激として、佐幕派と折れ合おうとしたのである。ついであるがら赤根は周防の百姓身分のあがりであった。

元総督である高杉は奇兵隊を煽動すべく赤根の不在中に隊にやってきて、幹部たちに、「君たちは、赤根にだまされているのだ。この高杉は毛利家の世臣である。赤根のような土百姓にな

にがわかるか」

といったという。

②西浦の里↓③天辻峠

赤松大三郎

あかまつだいさぶろう 一八四二—一九二〇

江戸幕府がその末期において技術の西欧化をいそいだことは、想像以上のものがある。

安政二年（一八五五）、長崎にオランダ式の海軍学校（長崎海軍伝習所）をひらき、その第一期生らが業を卒えて江戸にかえると、かれらのうちの何人かを選抜してオランダに留学させた。

留学生には、それぞれ専攻課目を規定している。

造兵技術（銃砲製造、火薬製造）は沢太郎左衛門（一八三四—九八）で、造船学は維新後、新政府の海軍に入った赤松大三郎——のち則良——が専攻した。

④開陽丸

明智光秀

あけちみつひで 一五二八—八二

よく知られているように、光秀は信長から備中（岡山県）で毛利勢と対峙している秀吉の後詰をせよと命ぜられていた。

私はかつて『国盗り物語』という小説を書いていたとき、この行動をおこす前の光秀側の外的事情や心理的事情をノートに書きこみ、書きこんだまま数日ふさぎこんでしまった記憶がある。本能寺を襲うということは光秀も当然考えたであろうように愚挙であった。なぜならば信長を殺せば織田勢力の諸將の目標になるだけで、諸將が光秀を目標に競って京にのぼりいちはやく光秀を討ちとろうとする。その苛烈な競争現象をまねくだけのことであり、ひとのために天下を用意してやるようなものがあった。それでもなお光秀の思考はそれにむかって飛躍したのだが、一説では信長から領国の丹波をとりあげられ、その替地としてまだ織田勢力下ではない中国地方のどこかをあておこなうという空手形のような内意を申しわたされていたともいう。光秀が後年の石田三成と共通している点は政略よりも行政が好きだったということである。このすぐれた民政家は与えられたばかりの丹波を撫でみかく

ようにしていわば善政を布きつつあった。丹波では光秀の治政はわずか数年ながら民間の光秀崇拜がつよく、江戸期では福知山あたりで百姓たちがひそかに光秀の霊を祭祀していたともいわれている。

その丹波をいずれはとりあげられ、しかもかれが好んでいない羽柴秀吉の功名をたすけるべく備中へゆけと命ぜられ、さらにはこれより前に織田家での游泳術の点で事故がかさなり、元来強靱ではないこの人物の神経が疲労しきっているという条件もあった。齢も、若くはなかった。五十をすぎ、心身の負担に堪えうる力は、少壮のころのようではない。これらさまざまの事柄を考えてゆくと、老ノ坂を東にくだるることによって飛躍した光秀の心情は、むしろ文学的課題よりも精神医学的課題ではなかつたかとさえおもえる。

浅井亮政 あさいすけまさ ? — 一五四二

浅井氏は、亮政のときに興隆した。おそらく、浅井ノ荘の寺社を押領したのであろう。寺社領などは武力をもたないために乱世には弱かつた。

亮政は、梟雄きょうゆうといつたたぐいの人であつたらしい。かれは姉川流域の野を見おろす小谷山おだにやまに城をきずき、本拠とした。

「小谷どの」などとよばれ、室町ふうの守護とは別趣の「大名」というものになつた。②浅井長政の記

浅井長政 あさいながまさ 一五四五—七三

〔浅井〕亮政すけまさが死ぬとき、織田信長はなお誕生後八年にすぎない。秀吉は五年か六年、家康はそのとしのうまれである。あとを継いだ久政は器量なく、六角氏に圧され、兵威が大いに衰えた。家臣たちはこのままでは六角氏に攻めほろぼされることを憂え、久政の子の長政がすぐれているのを見て、久政に説き隠居えいこさせ、長政を当主にした。長政は十六でしかなかつた。

以後、江北えいほく（愛知川えちがわより北部をいう）の兵をひきいて江南こうなんの六角氏の軍をしばしばやぶり、ついに南下して佐和山城をとり、江南の平野に大いに武威をふるつた。かれの生涯は二十八年というみじかい

ものであったが、政略はともかく、武将としては、統率力と機略、胆力などあらゆる点で第一級の人物であったといえる。

②④ 浅井長政の記

戦国末期、織田信長の出現とその勢力の急成長は、やや退嬰たいえいの気味のあった旧勢力にとつて意外でもあり、迷惑でもあった。旧勢力が一睡いっすいしているあいだに、まわりの景色がかわった。

同時に、信長の妹婿である浅井長政ですら、吹き荒れる嵐のように諸方を斬りとつてゆく織田家のすさまじい回転についてゆけぬ思いがしたのにちがいない。長政といえども、旧勢力である。信長などよりはるかにおっとりしている。

その上、

——浅井の家と織田家は、対等である。

と、おもっている。が、織田家が急成長してゆくために、力の差異ができすぎ、家来のようになつてしまった。浅井長政の気位の高さは、信長の同盟者である徳川家康のようにはなりたくないところにあつたろう。家康は独立した大名でありながら、信長にあごでつかわれ、部将のようになっているではないか。

長政はむしろ古い同盟者の越前の国主朝倉義景のほうに、同階級の意識や仲間意識をもっていたはずである。

越前一乗谷いちじょうだにを居城とする朝倉氏は、古い素姓すじやうをいえば成りあがりの戦国大名ではあったが、「守護」という、すでに形骸化したとはいえ、室町体制におけるきらびやかな権威を、実力で入手していた家でもあった。

とくに、浅井家の隠居の久政は、朝倉氏に権威を感じる感覚のもちぬしであつたらしい。久政からみれば尾張の織田家などは出来星できぼしの成りあがりすぎない。

②④ 姉川の岸

朝倉敏景（孝景）

あさくらとしかげ（たかかげ） 一四二八—八一

朝倉敏景が、政治的トリックをもって、表むき、京の將軍から任せられたとしつつも、実際には実力をもって越前守護職という室町体制の正規大名になった。

ずっとのちに、素姓のあやしい人物がそのあたりを斬りとって戦国大名になってゆくのはちがひ、形式だけは踏んでいるのである。

しかし、やったことどもは、中世的な公家・社寺あるいは室町幕府体制をぶちやぶるといふ、新規なことであった。つまりは京にある既成勢力の者が不在領主として租税だけを送らせるという中世体制を無視し、それらを実力でわがものにし、一国独立の体制をとったのである。

敏景は、この一乗谷城をもって越前の首都とした上、自分に臣従した大身の者は決してその村落に居住せしめず、すべて一乗谷に住まわせ、かれらの郷村については代官だけを置かせた。

のちに戦国の諸大名がやったこの種の体制の先例をひらいたといつていい。

さらに一乗谷は越前における文化の中心にもなった。建物その他も京風で、また連歌、茶、申樂、さらには京からよばれた公家学者によって『日本書紀』『蒙求』『中庸』『孟子』が講ぜられるなど、朝倉氏百余年の一乗谷文化は、小京都とでもいふべきものであった。

百余年のあいだには、貿易もやっていたらしい。

⑩将棋 ↓ ⑪一条兼良の莊園⑫姉川の岸

朝倉広景 あきくらはひろかげ 一二五五—一三五二

朝倉氏は、但馬（兵庫県の一部）の養父郡の朝倉という小さな里を発祥の地としている。

いまの兵庫県では、この地名が消えているのかどうか。養父郡の主邑である八鹿の五キロ北方に宿南という村がある。朝倉という里は、この宿南のなかの小字だったらしい。このあたりには香気のはげしい山椒ができるところで「朝倉山椒」などといわれたという。

べつにさしたる土豪ではなかったが、足利尊氏が丹波篠村で軍兵を集結して旗揚げしたとき（一三三三年）、広景という者が但馬から馳せ参じ、その麾下に加わったのが、朝倉氏が世に出るはじめて

ある。

朝倉系図では、この広景は通称孫右衛門といった。当時の但馬で勢力があったとみられる諸豪族の家名のなかに朝倉姓が見あたらずとところから推して、おそらく率いていた勢力よりも才覚一つで重んじられたのであろう。

足利尊氏の手勢は、多くは関東、東海の軍兵で、畿内の地理に暗かった。

「孫右衛門」とよばれた広景は、ひよっとすると但馬に多い製鉄の関係者か、鉦山師、もしくは、それらを運ぶ馬借、車借の親方だったかもしれない。推測だが、才覚がある上に、四方の地理に通じていた男であったのではあるまいか。

尊氏は、この男を一族の足利高経（斯波氏を称す）に属させた。高経は大いに広景を重宝したらしく、のち尊氏の世になり、越前守護になったとき、老臣の一人になり、坂井郡の黒丸という地に館をつくった。

この黒丸も、一条家の莊園で、広景はその代官をも兼ねたという。莊園を管理し、年貢をとりたて、上前をはねて、適当に京都の一条家に送るのである。広景は九十八まで生きるといわれる。

㊦ 一条兼良の莊園

朝倉義景 あきくらよしかけ 一五三三—七三

朝倉氏の最後の当主は、敏景の玄孫になる義景である。

「宗滴」という一族の老人が後見した。宗滴は朝倉氏の三代の当主を輔佐し、戦場にあつては百戦の練達者であったが、義景が若くして家を嗣いだときは七十をこえていた。宗滴の生前、朝倉氏の武威は一向一揆を圧倒したが、死後、義景の気分がややゆるんだ。

義景は、一乗谷に沈没した文化が好きであった。相変らず京から、公家、詩僧、連歌師、さらには高名な医者などが、訪ねてきては長逗留して、漢学の講義をしたり、連歌の会をしたり、曲水の宴

を張ったり、ときには自著の出版を依頼し、かなえられたりした。

ついには、永禄十年（一五六七）には漂泊の将軍（厳密には継承の有資格者）義秋（のち義昭）まできて、この谷に小一年逗留して遊んでいた。この間、義昭と改名する。かれは義景に対し、

「ぜひ馬を京に進めて、わしのために京を回復してくれ」

と、たのんだ。永禄十一年のことである。

が、義景にはその勇気がなかった。

義景の運命を決したのは、義昭から持ちかけられたとき、上洛する決断がつかなかったことであった。当時、朝倉氏は、実力、戦略的環境という点において、信長と大差なかった。むしろ伝統の古い大名として名声ははるかに上であった。上洛しなかった理由を一向一揆などに帰すべきでなかった。要するに義景には、それだけの器量がなかったのである。

断るということは、平和を保つということにはならなかった。もつとも断ったとき、うまく信長とのあいだに友好関係を保持すべき外交上の手を打っておけばべつであったが、断り方がいへばもなかった。つまりは、信長といつでも戦うという意思をあきらかにする結果になった。義景は、一乗谷の平和を愛した。愛する以上は、外交にもっと気をつかうべきであったろう。

義景は、相手の信長が、車輪のように回転してやまない男であるという認識に欠けていた。

麻田剛立 あさだごうりゅう 一七三四—一九九

⑬将棋 ↓ ⑭姉川の岸

剛立は漢訳書などを通じて西洋天文学を独習し、それに似た体系をたてた人で、生計は町医まちいで立てていた。

⑮陸奥一宮

浅野長勲 あきのながこと 一八四二—一九三七

広島の浅野家は温和な藩風で、いまでも地元では悪印象がないらしい。

この家に、浅野長勲という長命のひとがいた。

明治維新のとき二十七、八ですでに藩主であり、慶応三年（一八六七）十二月九日、薩摩藩が蔭で策謀しておこなわれた有名な小御所会議にも出席した歴史的人物である。ともかくも現役の大名のまま維新と廃藩置県を経験し、昭和十二年まで生きたたために、九十六歳で亡くなったときは、新聞の死亡欄が「最後の大名」と書いた。

②鳳源寺

浅野長治 あきのながはる 一六一三—一七五

浅野藩政の初期の一時期、三次に五万石の分家がつくられた。

その「三次藩」初代の浅野長治の治績は卓越しており、いまでも三次ではこの人は「鳳源院」様とよばれてとくに敬意がはらわれている。ちなみに浅野家のいま一つの分家である播州赤穂の城主浅野長矩に嫁して、のち「忠臣蔵」の劇中の人になる瑤泉院（阿久利）は、この長治の娘である。

この三次浅野家は、ながくはつづかなかつた。その理由は代々の当主が病気で若死するためで、広島の本藩としては直轄領にせざるをえなかつたということであつたらしい。

三次は、霧の町である。

その上、「三次藩」時代の藩の館は、西城川と江の川にはさまれた低湿地にあつた。若死の病因は結核であつたという。

②水辺の民

浅野幸長 あきのよしなが 一五七六—一六一三

福島氏に代つて芸備両国のぬしになつたのは浅野氏である。

浅野氏は秀吉の妻寧々（北政所）を養つた家で、秀吉にとつては姻戚になる。関ヶ原の前夜、寧々が暗に家康に加勢したため、浅野氏としては家康方につくことに倫理的苛責がすくなくて済んだ。あとの大坂ノ陣で淀殿と豊臣秀頼を亡ぼすことについても、さほどに苛責のあとがない。

むしろ徳川氏への忠誠行為のほうに露わで、この点、徳川氏のほうでも十分認めており、福島氏と

ちがって政治的安定感があった。

浅野氏は長政、幸長とつづき、長晟（幸長の弟）の代に芸備両国に入部するが、この三代ともごくふつうの常識人であったために家風は安定し、組織もよくととのっていた。

——なんとといっても芸備両国は毛利氏の遺領だから。

という緊張感で農民に接し、毛利氏以上の政治をしたいという気分が十分にあった。この初期の緊張が、徳川二百七十年のあいだ、浅野氏に過不足のない穏和な藩風をつくらせた。

②水辺の民 ↓ ④榎井村付近

朝彦親王 あさひこしんのう 一八二四—九一

この時期〔天誅組事変〕、すでに京都にも十津川郷士がいる。宮門の衛士として駐留し、中川宮の庇護下にあった。この宮は、その年代によって呼ばれ方がちがっている。尊融法親王、青蓮院宮、次で還俗して中川宮朝彦親王と称し、宮廷における薩摩勢力を代表し、過激な長州系の公家たちをおさえ、その追いおとし（文久三年八月十八日の政変）に決定的な役割をはたし、以後、宮廷勢力の二中心になった（維新後、長州派から報復的に広島へ流され、その後、帰京し、久邇宮と改称した）。

この中川宮は当然ながら天誅組に反対で、これを討伐すべく宮廷を方向づけた。かれは在京の十津川郷士前田雅楽らをひそかに十津川へ送り、「令旨」という宮廷的権威をもって、郷民の離反をすすめさせただけでなく、「令旨」においては、天誅組浪士をもって単に「乱暴の浪士」と規定し、「追討之議、武家（註・幕府）へ被仰」と、正義が逆転したことを告げ、さらに十津川人はこれを「早々に追討」せよと命じた。

⑬続・天辻峠

朝山日乗 あさやまにちじょう ？—一五七七

織田信長の寵僧に、朝山日乗という天台宗の学僧がいた（日乗という名から日蓮宗とされることもあるが、所属は天台宗である。天台宗の本山の叡山は教学上のいわば総合大学であるだけに、日乗は仏教の本質にあ

かるく、従ってキリスト教でいうところの靈魂の存在を否定していた。以下は、永祿十二年（一五六九）春のことである。信長は、京にあった。

摂津の切支丹武士だった和田惟政（一五三二〜七三）が申次もうしつぎとなつて、イエズス会士ルイス・フロイス（ポルトガル人）を信長に拜謁させた。フロイスは法兄弟イルマヤンロレンソ（肥前うまれらしい。前身は半盲の琵琶法師。ザヴィエルに接して受洗した）をともなつて信長の前にすすみ出た。三百人の織田家の家臣が陪席しており、信長のそばには、日乗が侍して、フロイスと問答した。日乗は極端な切支丹ぎらいだったために、つい狂躁し、教義論を吹っかけて兩人を挑発し、偶発ながら宗論になつた（信長が宗論好きであつたことにもよる）。

主題が、靈魂の存否論になつた。日乗はその存在を否定してついに論破され、血迷つてしまつた。

「そうとあらばこの刀で貴殿（フロイス）の弟子ロレンソを殺してやろう。その時は、人間の中心にあると貴殿が申されるこの靈魂を見せてもらおう」といつて、その刀を鞘から抜き始めた。

（ルイス・フロイス『日本史』柳谷武夫訳）

狂乱した日乗をかたわらの武士たちがおさえ、刀をもぎとつた。日乗への信長の寵は、この事件によつて冷めたといわれる。

②ザヴィエルの右手

足利義昭 あしかがよしあき 一五三七〜九七

流亡の將軍義昭は、いきなり信長のもとにきたのではなかつた。かれは本来、奈良で仏門に入つていた。兄である將軍義輝が三好・松永党のために弑されたあと、奈良をぬけだし、まず南近江の六角承禎じやうてい入道（義賢）をたよつたが、好意は持たれなかつた。やむなく脱出して若狭から越前に入り、朝倉義景をたよつた。義景は歓待したが、かれには義昭をかついで上洛するほどの自信はなかつた。

義昭は、買手をさがす商人のようだった。美濃の岐阜城にいる織田信長にその気があると知つて越前を去つた。

④浅井長政の記 ↓ ⑧将棋